

平成 21 年 5 月 7 日現在

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2007～2008

課題番号：19520471

研究課題名（和文） 絵本を使った小学校英語活動における教師の言語調整および相互交渉スキルに関する基礎的研究

研究課題名（英文） Teachers' linguistic modifications and interactional strategies in picturebook reading in elementary school English activities

研究代表者

萬谷 隆一（YOROZUYA RYUICHI）

北海道教育大学・教育学部・教授

研究者番号 20158546

研究成果の概要：

本研究は、小学校英語活動における絵本を用いた読み聞かせを質的・量的に分析することで、各種の読み聞かせの相互交渉スキルを抽出し、より有効な読み聞かせへの手がかりを得ることである。

ALTおよび日本人教師の読み聞かせ場面をビデオ収録し、プロトコル化し、教師の言語調整および相互交渉スキルの分析を行い、発話数、発問や応答行動のタイプなど ALTおよび日本人教師の特徴を探った。

また、日本人教師 3名の事例研究から、絵本の読み聞かせにおける発話カテゴリーの頻度分析を行い、各種の相互交渉スキルの使用様態を明らかにした。その結果、教師たちは、3種類の相互交渉スキル（アウトプット誘引系、インプット系、発話意欲促進系）を用いていることが明らかになった。

この他、本研究では、カテゴリー分析に基づき、英語発話を引き出す教師の相互交渉スキルとして賞賛や英語による発問が重要であることが示唆された。最後に、読み聞かせの回数により、教師が発問や応答を調整していることも示唆された。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	2,400,000	720,000	3,120,000
2008年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
年度			
総計	3,000,000	900,000	3,900,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・外国語教育

キーワード：教授法・学習理論・小学校英語教育・教員養成・絵本・読み聞かせ

1. 研究開始当初の背景

これから一般化すると予想される小学校英語教育における指導方法は、指導者の問題もあり、しばらくの間、簡便なりピート、ゲーム、遊びなど

を通して学習する活動が普及・浸透する時期が続くものと考えられる。しかし、そうした指導方法は単語や発音を習得させる上で必要なものではあるが、それだけでは機械的な細切れの練習に終始し、子どもたちの動機づけを低下させやす

い。

小学校英語教育において子どもの英語力を高めるためには、言葉を子どもの心に着実に残すための意味の脈絡と必然性がぜひとも必要である(横田 1997、堀江 1994,1995)。さらに Long(1985)のインタラクション仮説が示すように、言葉による豊かな相互交渉を通して、子どもが自然に言葉を使う活動であることが必要である。以上のような観点から、本研究は、絵本を使った英語活動(ストーリーテリング)を取り上げる。絵本は、意味理解への視覚的な手がかりや豊富な文脈という優れた特質を持ち、「意味の世界」を重視した言語習得を促進する上で大きな可能性を秘めている。

絵本を活用するための指導方法については、実践家の助言が多く示されている(例:直山 2007, Slattery and Willis 2001)。しかし、わが国では小学校英語活動における絵本の読み聞かせにかかわる具体的な検証はまだ少ない。むしろ、米国の母国語習得研究における研究が盛んで、多くの研究が絵本の読み聞かせが言語発達や Literacy にプラスの影響を与えることを示している(例:Lonigan 1994)。

また、読み聞かせの方法の如何によって理解や習得の度合いが変わるといことも明らかにされており(例:Whitehurst et al.1988)、指導者の相互交渉の力量によって、子どもに言葉を吸収させる度合いが変わってくるのが分かっている。つまり、ただ読み聞かせるだけでは効果は薄く、子どもに合わせて相互交渉を織り込むことで、より言語習得が促進されると考えられる。

本研究が扱う読み聞かせの相互交渉に焦点をしばった先行研究としては、西尾(2008)が「インタラクションのある読み聞かせ」と「インタラクションのない読み聞かせ」を比較し、前者がより効果があることを示唆している。しかしこの研究の問題点は、インタラクションの具体的な方法を明示的に分析しておらず、どのような種類のインタ



クションが効果を上げたのかについて分析がなされていない点である。その背景には、絵本の読み聞かせにおけるインタラクションの方法について、これまでのところ、どのような方法や類

型があるのか実態が明らかにされてきていないという問題がある。

現実に教師がどのような相互交渉を用いているのか具体的に検証する必要がある。このような相互交渉の類型化・傾向を検証することは、どのような相互交渉を行えば言語発達が促されるか研究する必要がある。

2. 研究の目的

本研究の目的は、絵本を用いた読み聞かせを質的・量的に分析することで、各種の読み聞かせの技術を抽出し、より有効な読み聞かせへの手がかりを得ることである。

3. 研究の方法

本研究では、以下の 2つの研究を行った。

研究1

4 人の日本人教師(JTE)と 3 人の外国人教師(ALT)の読み聞かせを録画し、プロトコル分析を行った。発問カテゴリー(Yes-No Question, Wh-Question, Comprehension, Repeat Prompt, Participation Prompt, Completion Prompt)と児童の応答に対する反応カテゴリー(Doubt, Negation, Acceptance, Recast, Answer Confirmation, Answer Provision, Gesture Clue, Alternative Clues)を設定して、頻度分析した。

研究2

3 人の教師(JTE)の読み聞かせにおける相互交渉スキルの事例研究として、読み聞かせ場面をビデオ収録し、プロトコル化した。なお教師には、同じ絵本を 2度以上続けて読み聞かせするよう指示した。

書き取ったプロトコルは、発話ごとにカテゴリー判定を行い集計した。(Yes-No Q E, Yes-No Q J, Wh-Q E, Wh-Q J, Repeat Prompt, Completion Prompt, Acceptance, Negation, Doubt, Recast, Answer Confirmation, Answer Provision, Alternative Clues)

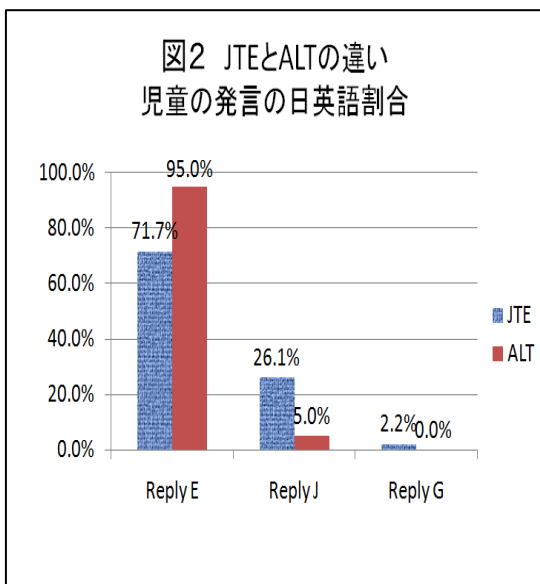
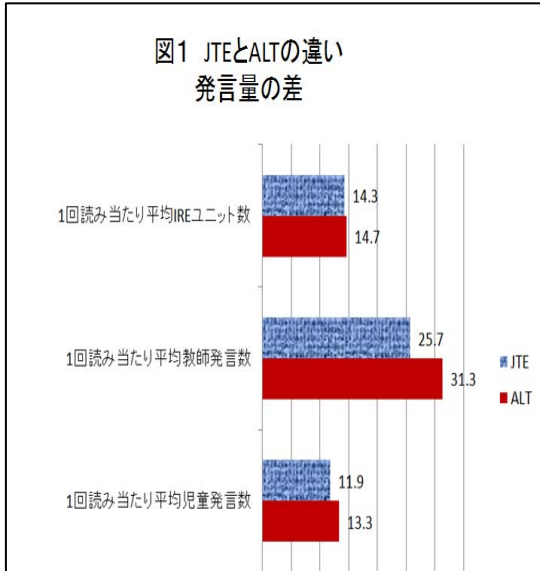
4. 研究成果

研究1

相互交渉のカテゴリー分析により、以下の点が明らかになった。

教師と児童のやりとりのユニット数、すなわち教師発問－児童の反応－教師の応答からなる

IRT ユニット (Initiation-Reply-Evaluation) は、ALT・JET ともに差はなかったものの、ALT は発言数がやや多く (1 回の読みの平均発言数: ALT 31.3 回、JET 25.7 回)、子供の英語発話も若干多かった (図1)。しかし、ALT の読み聞かせの場合、子供の発話全体の95%が英語であり、JET の場合は71.7%が英語である (図2)。また、Completion prompt や Answer Confirmation など ALT に特徴的な発問・応答タイプがあることも示唆された。



この他、ALT、JET に共通する特徴として、誤りの訂正行動が間接的であるという傾向も見受けられた。

(「英語絵本の読み聞かせにおける教師の相互交渉スキルに関する事例研究」第8回小学校英語教育学会 (JES) 福島大会発表研究 2008/7/20)

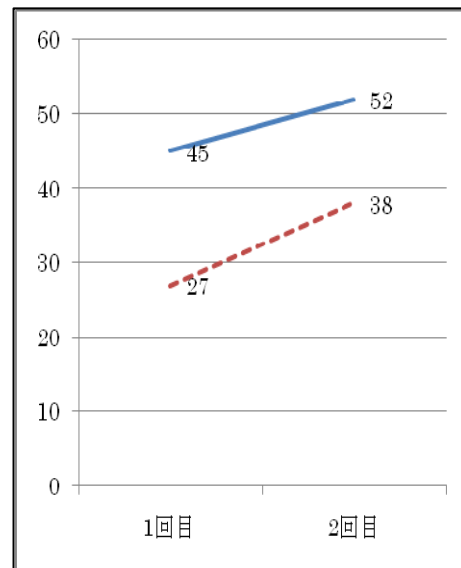
研究2

3 人の教師 (JET) の発話カテゴリーの頻度分析を行った結果、以下の点が明らかになった。まず教師たちの相互交渉においては、第 1 に、教材に合わせて子供の発話を引き出す問いかけ (アウトプット誘引系の談話手法: Wh 疑問文、Yes-No 疑問文、Completion Prompt) を用いていること、第 2 に、正しい英語表現を印象づける各種の談話手法 (インプット系談話手法: Recast、Repeat prompt、Answer Confirmation、Answer provision) を用いていること、第 3 に、発話の意欲を促進するために、情緒面を重視した働きかけ (発話意欲促進系の談話手法: Acceptance、Doubt) を用いていることが明らかになった。

また本研究では、英語発話を引き出す教師の談話手法として、子供の発話を賞賛し認めることがきわめて重要であること、さらに日本語より英語で問いかけることが有効であることを示した。

次に、本研究では教師は同じ絵本を続けて複数回読み聞かせているが、3 人の教師とも、初回読みよりも 2 回目以降の方が発話量が増加し (教師 F の例: 図3)、教師は子供の力の伸びを見極めながら子供の発話を引き出す工夫をしていることも明らかになった。

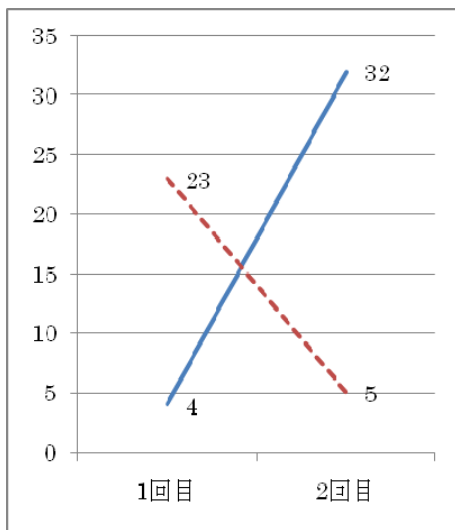
図3 教師と子供の発話量変化 (教師 F)
絵本読み 1 回目 → 2 回目



実線 = 教師の発話量
波線 = 児童の発話量

また 2 回目以降の読みでは子供の英語発話も多くなる傾向があり (教師 F の例: 図4)、これは 1 回目でインプットした英語が 2 回目以降に児童からアウトプットされるためであると推察される。

図4 児童の日・英語発話量変化(教師 F)
絵本読み 1回目→2回目



実線＝児童の英語発話量
波線＝児童の日本語発話量

最後に、児童の英語の発話がみられた「直前」の談話手法を分析したところ(表 1)、各種の発問が上位を占めた。とりわけ英語による発問(Wh-Q Eng、Yes-No Q Eng)が英語を引き出す効果があることが分かった。また、特筆すべきことは、最も児童の英語を引き出した談話手法が児童の発話をほめる行為(Acceptance)であったということである。児童の英語を引き出す談話手法として、各種発問だけでなく児童の発話を励ましほめることの重要性が示唆された。

表1 児童の英語発話を誘引した
直前の教師の発話カテゴリー

順位	カテゴリー	頻度
1	Acceptance	31
2	Wh-Q Eng	26
3	Repeat Prompt	25
4	Yes-No Q Eng	25
5	Wh-Q Jpn	24
6	Yes-No Q Jpn	18
7	Doubt	13
8	Completion Prompt	13
9	Answer Provision	12
10	Recast	10
11	Alternative Clues	7
12	Negation	4

(「小学校英語活動での絵本読み聞かせにおける教師の相互交渉スキルに関する事例研究」『北海道教育大学紀要』60巻 1号、教育科学編、2009年 8月発行予定)

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計1件)

① 萬谷隆一「小学校英語活動での絵本読み聞かせにおける教師の相互交渉スキルに関する事例研究」『北海道教育大学紀要』60巻 1号、教育科学編、2009年 8月発行予定、査読無し

[学会発表](計 1件)

① 萬谷隆一「英語絵本の読み聞かせにおける教師の相互交渉スキルに関する事例研究」第8回小学校英語教育学会(JES)福島大会 自由研究発表 2008/7/20 郡山市

6. 研究組織

(1) 研究代表者

萬谷 隆一(YOROZUYA RYUICHI)

北海道教育大学・教育学部・教授

研究者番号: 20158546

(2) 研究分担者

堀江 祐爾(HORIE YUJI)

兵庫教育大学・学校教育研究科・教授

研究者番号: 10157068

(平成19年度)

マイケル・クロフォード(CRAWFORD, MICHAEL)

北海道教育大学・教育学部・准教授

研究者番号: 80360957

(平成19年度)

皆川 治恵(MINAGAWA HARUE)

北海道教育大学・教育学部・准教授

研究者番号: 70229756

(平成19年度)

(3) 連携研究者

堀江 祐爾(HORIE YUJI)

兵庫教育大学・学校教育研究科・教授

研究者番号: 10157068

(平成20年度)

マイケル・クロフォード(CRAWFORD, MICHAEL)

北海道教育大学・教育学部・准教授

研究者番号: 80360957

(平成20年度)

皆川 治恵(MINAGAWA HARUE)

北海道教育大学・教育学部・准教授

研究者番号: 70229756

(平成20年度)